若葉な僕ら

あーゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
若葉な僕ら

【Ｎコード】
Ｎ２１２９Ｙ

【作者名】
あーゆ

【あらすじ】
両親の代理でパーティーに出席することになった新一。蘭を連れて行くが……

若葉な僕ら

「あんの道楽夫婦〜…」

端正な顔立ちを歪ませながら自分の両親を恨む。

その隣では目を白黒させながら必死に平静を装う美少女…

「と…とりあえずコーヒーでも飲む？」

――ことは一週間前に遡る

「はぁ？」

『だからパーティー兼顔合わせ？優作の小説が映画になったの』

あたしが主演つとめたかったわぁ。なんて言いながら話を進める。

『でね，優作と出席する気満々だったんだけど…』

「察しはつく。締め切り追われてんだろ」

『そうなの…もうホテルもとってもらっちゃってるし。作者サイドが欠席ってのも…だから…』

「い！や！だ！！」

『なぁんでよ！！でもそんな返事は想定の範囲内よ！！おそらく１０分後，行くって返事をあたしにすることになるわ！！』

そう言って有希子は電話をきる。

それと同時くらいに工藤家に来客。

「しんいちー！！いるー？」

「蘭？」

長い長い片想いからようやく”恋人”に昇格した幼なじみの姿があった。

「あ，新一？あのね，今朝おば様から小包が届いて…」

蘭が手に持っていた段ボールを見せた。

「おじ様の小説が映画になるんですってね！！そのお祝いパーティーに呼んで頂けるなんて嬉しいな♪ドレスまで用意してもらっちゃった！！」

とても嬉しそうに新一の両親に感謝の言葉を並べウキウキしている。

『…蘭を味方につけやがったな…こんなウキウキされちゃぁ連れてくしかねぇじゃねぇか…』

新一は先ほど置いた受話器を手に取りダイヤルをする。

「あ。母さん？さっきの話だけど…」

『ほほほほ！！言った通りでしょ？大阪行きのチケットは蘭ちゃんの小包に入れたから』

「え？東京じゃねぇの？」

『えぇ。舞台が大阪だから。ついでに観光でもしてくれば？』

「観光って…」

「大阪なんだね，場所。和葉ちゃんたちにも連絡しとこうかな♪楽しみね！！」

こうして2人は大阪へと行くことになった。

道中の新幹線ではなにか遠足と間違えているのではないかと思うほどに蘭が

”ポッキー食べる？それともガム？”なんてお菓子を次から次へと出していた。

「和葉ちゃんに連絡したらね，今日は服部くんの剣道の試合なんだってさ。明日は少し会えるかもって。」

「あんまはしゃぐなよ。パーティーは明日なんだからよ。つっても退屈な挨拶回りだけどよ」

「……挨拶…あたしどんな立場？」

「工藤優作の息子の婚約者―――とでも言っとけば？」

さらりと冗談を言う。

「えぇぇぇぇ！？？？」

蘭が真っ赤になって目を白黒させる。

「嘘だよ。代理ですって言えばいいんだよ」

「あ…あっそう」

どちらともとれない態度に少しふて腐れながら持っていた小説に視線をおとす。

高級ホテル

「今日はどうする？」

「母さんは観光でもって言ったけど…去年も来たしな」

「あ！！たこ焼き！！新一，食べる？」

「…おめー…さっきから食ってばっかだな。」

2人はぶらぶらと街を歩きまわるが
東京を出たのが昼だったのもありあっと言う間に日が暮れた。

「用意されたホテルって近いの？」
「あぁ。駅から近い高級ホテルだとか母さん言ってた。」

「…なんか緊張するね」

ホテルはロビーに噴水。
カーペットが敷き詰められたいかにも”豪華”なところだった。
『手続きは新一がやってくれるからいいけど…落ち着かない！！！！』
ロビーのソファーで待っている蘭はソワソワしっぱなしだった。

『って言うか…なんの疑問も持たなかったけど部屋って…』

同じことを考えていた新一は鍵を受け取り微妙な表情を浮かべた。
支配人はなにか手違いがあったかと新一に声をかけるが新一は笑顔でかわした。

与えられた鍵を持ち部屋へと入る。
蘭と新一は部屋を見て固まってしまったのであった。

「あんの道楽夫婦〜…」

部屋は”工藤夫妻用”に用意されたいわゆるスイートルームで
綺麗なバスルームに
お洒落な出窓
冷蔵庫にＴＶ，

おまけにお洒落な大きいダブルベッドがあった。

『こんな高級ホテルでもうひとつ部屋をとるなんて無理だし…』
新一はぐるぐると考えていた。
とりあえず蘭が淹れてくれたコーヒーをすする。

『たしかに蘭とは幼なじみだから一緒に寝たこともある。それに今は恋人同士だから一緒のベッドでも問題はない…が』

悶々と思考を巡らせながら向かいの蘭に目をやる。

落ち着かない態度でカップを持つ蘭の表情は戸惑い意外のなにもの

でもなかった。
新一はカップを置きため息をひとつついた。
蘭はびくりと肩を揺らしたがそんな彼女に新一は優しい眼差しを向けた。

「…んなビビんなよ。俺って信用ない？」

「え…いや。高級感にちょっと落ち着かなくて…」

「じゃぁなに？このベッドがひとつしかない状況は高級感にかき消されて気にならないのか？」

わざと意地悪な質問をぶつける。
顔を真っ赤にして泣きそうな表情になった蘭は反論しようとするが言葉がでない。

「冗談。わりぃな。母さんから何も聞いてなかったしベッドも2つだと思ってたんだよ。よく考えりゃ外国暮らしの夫婦に与えられた部屋だかんな，ダブルベッドが普通だよな。」

立ち上がりカバンから携帯を出した新一の行動に蘭は疑問を抱く。

「誰かに電話？」

「今夜は服部に泊めてもらうよう頼むよ」

「だめ！！こんな高級ホテルに1人にしないで！！だったらあたしが和葉ちゃんに…」

「暗くなってんのに今から行くのかよ。女が慣れない道歩くなよな」

「でも…」

会話は堂々巡り。
ちっとも前に進まないことに双方苛立つ。

「もう！！せっかくだし2人でここでいいじゃない！！別に今までもあたしコナン君と寝たりしてたし！！」

蘭が切り出す。

「ばっ……お前なに言って…」

「あたしと一緒には寝れないっていうの？」

「そんなわけじゃ…」

「じゃぁ決まり！！あたしお風呂先に入るね！！」

そう言うと蘭はさっさとバスルームへと向かってしまった。

『……まじかよ…』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2129y/

若葉な僕ら

2011年11月5日01時12分発行